

雜 纂

カイゼルについての一新著

Ernst Ludwig, Wilhelm der Zweite. Berlin: Ernst Rowohlt Verlag. (An English translation by E.C. Mayne. Putnam)

文學士 大村 作次郎

世界大戰後、關係諸國政府に於る公文書の公表や、樞密なる地位にありし政治家、軍人の備忘録の發表などが頗る盛んとなり、従つて大戰前史、特にその國際外交に關する著述も亦甚だ多數に出現したが、これら驚くべき多量の戦後文獻は、大部分、個人的辯明でなくば、大膽な國民的宣傳であつて、人をして去就に迷ふの感あらしめる程である。それは、多くはあの前古未曾有の大立廻

に於て、舞臺に出たか、黒幕に居つたか、いづれにしても、何等かの役目を演じた人々によつて執筆されたからだ。されば、さかく大戰の責任を問はれがちなる獨逸人の間に於て、上述の傾向の盛んであるのは自然である。

かくの如き獨逸著述界にあつて、本書「ウキルヘルム二世」は著しく選を異にする。私は之を最近のタイムスに據つて紹介する。まづ著者エミ

ル・ルードキヒが、大戦に於て何等の直接關係者でなかつたことが、第一に注目に價す。即ち在官者でもなく、在朝者でもなく、感傷的平和論者でもなかつた。それで、よしやその人が實は純粹の歴史家でなくて寧ろ劇詩家であるにせよ、却てそれだけ態度が純眞であつて、心理的批判の銳利であることは、史料の新鮮豊富と相待つて本書に對する吾人の興味を頗る大ならしめるものがある。著者は何等一身上の偏見もなく又た宣傳的態度もなく、大戦後公表された獨逸の史料を利用してカイゼル及びその周圍の人々をして自由に物語らしめた。緒言を見よ、“You will not hear the voice of Socialists or of foreigners in any of the following pages; but only those of the Emperor himself, his relatives and his friends, his Chancellor's and Ministers, his generals and his courtiers.”(タイムスの譯文)。然る後に著者は、カイゼルその人のみならず

これを圍める裏面的勢力即ち Camarilla の連中を、その銳利なるメスを以て解剖せんとするものである。

著者ルードキヒは先づ、カイゼルの幼年、青年時代を描き、彼の片腕が生れながらにして縮んで居たことが、如何に彼の自尊心を傷け、彼の全性格に影響する所大なりしかを述べて居る。ビスマルク退いてから、皇帝の所謂 “der Neue Kurs” が始つたのだ。最初 Captiv, Hohenlohe が相次いで宰相となつた。著者はかゝる表面的勢力に對しては略述して居る。それは黒幕に居る眞實の勢力に對して主力をつくす方針で、實際かくの如き人物により多くの筆を向けて居るからである。最後の、多事な時期の宰相 Bethmann-Hollweg に對してすら同やうに略述されて居るのも亦、同一の理由に屬する。實にこの宰相は「海神の子」Tipitz や軍神の子たちの實際的勢力に壓倒されて居た。著

者は、Camarilla の代表的人物として、先づ Philip Eulenburg 公を拉し來り、「その容姿優美にして常に媚態を具へ、機智に勝れ、談話に長じ、詩歌音樂に秀で、物真似巧みにして文筆亦頗る洗練されいつとでも拔目なく俊敏に立廻り、當にならぬが圓轉滑脱な交際場裡の花形」、この貴族が若きカイゼルの心を奪ひ骨身までもの信頼を最初に贏ち得たのは當然であつて、爾來約十五年間カイゼルの意志を裏面より繰りゝの勢力絶大なるものあつた

しかも彼はその數々の醜行によつて最後は頗る悲惨なる破目に陥つたのであつた。次に、元帥 von Waldersee は、オイレンブルグ公とその型を異にす彼は強き敬虔の心によつてカイゼルを動かしたのであつて、自ら宰相たらんどの野心を有しオイレンブルグ公と相結ぶ所あつたが、後にカイゼルの行動を批判して不興を蒙つてしまつた。一八九七年末にはオイレンブルグ公の勢力は絶頂に達した

當時 Bernard von Bilow 尙ほ伯爵であつたが既に外交家としてその名を擧げて見た、溫和にして伶俐である。オイレンブルグは之を以て老ぬたる Hohenzollern 公の後繼者に適せりとなした。この推薦與つて力あつて、ビュローは遂に一九〇〇年宰相となつたのである。

多年極力カイゼルを讚美して來たビュローを以てしても、遂にこれと衝突すべき時は來た。これ、最近の史料發表によつて大いに明かされた Balfour 密約事件でたる。即ち、一九〇四年四月に成立した英佛協商に對する對抗外交として、カイゼルは、南に於てはモロッコに於て Tangier 事件を惹起し、北に於ては Boko 事件を作つたのであつて、この密約によつてカイゼルは、日露戰爭によつて困窮せる露國を誘ひ、更にその同盟たる佛國をも引入れ、以て英國を孤立に陥れんとしたのである。この間の消息は、獨逸外務省文書の大

集成たる Die Grosse Politik 及び有名なる Willy-Nicky Correspondence によつて明かされる所であるが、著者は、當時カイゼルと宰相ビュローとの間の交換書簡を引用して事件の真相を躍如たらしめて居る。即ち、ビオルケ灣頭“Polar Star”號船室に於て（これに關しては異説あり）兩皇帝の間に祕密協約が調印さるゝに至りし状景や、ビュローが、自ら何ら諮らるゝ所なかりしを憤り、協約の内容に關して反對を説へ若し聞かれずんば辭職せんとせしに、カイゼルは平常に似ざる妥協心を以てビュローを慰藉したことなどが如實に描かれて居る。

このビオルケ問題に於てビュローの味方をしたのは、獨逸外交に於る謎の人物 Holstein である。最近の外交史研究の進歩は、獨逸外交に於る彼の意義を大いに高め來つた感がある。彼が裏面より繰る糸が獨逸對外策に偉大なる影響を與へた

ことは、ベルリン駐在の諸國外交官にとつて永く解き難き謎であつた。彼に對する著者の批判は同情的である。即ち、彼の政策は勿論邪道的であり危険なるものではあつたが、そこに異常なる勇氣と努力とが存在して居るを認むべきなりとし、更に、彼が自己の利慾の爲に公務上の報道を私用したと云ふ最近の彼に對する非難を全く排斥し、彼は勿論權力を愛し、事實表面上の地位よりも遙かに大なる權力を弄びしとは云へ、これ決して自己の私慾の爲になしたるものに非ず、彼の誤れる點はたゞビスマルク風の政策をビスマルクその人なしに、カイゼルその人によつて實行し得ると信じた點にあるとして居る。Tanger 事件に關して彼が責任を有するは、實にかゝる點に存する。彼はこの事件に於る獨逸外交の失敗の責を負つて辭職し、その後心快々として樂まず幾ばくもなくして死んだ。死するに際して豫言して曰く“the Young

Emperor would either destroy the Empire or die in a madhouse.” 以て、單なる引かれ者の小唄とすべからざると思ふ。

ホルスタイン退いて後二年にして所謂 “Daily Telegraph” 事件起り、利け者ホルスタインを失つた宰相ビュローは大いに困窮したのである。この事件は、一九〇八年十月二十八日の Daily Telegraph 紙上に、カイゼルとの會談なりとして、彼の對英政策が掲載されたことに始るものであつてこれが英佛兩國民の間に於て大問題となり、英國ではカイゼルの海軍政策に對する恐怖よりその對獨感情一層に惡化し、獨逸ではカイゼルの輕卒なる行動に對する非難大となり、遂には聯邦議會にてカイゼルの退位をさへ極言要求する貴族が現はれるに至り、ビュローが自ら非難の的となつて居る間に、カイゼルその人は田舎に逃れて新しき寵人 Fürstenberg 公と共に狩獵、舞蹈の中に日を

消したのである。これによつて著者が、カイゼルの卑劣なる性格の一面を示さんとせしものであることは疑ないと思ふ。このことは、カイゼルのこの田舎生活の間に或夜、他の寵人 Fürstenberg 伯が舞踏の最中に頓死した際、カイゼルは、今や彼自らの作りし事件によつて獨逸の政界が大混亂に陥つて居るに係らず、かゝる浮華なる生活を送つて居ることに對する天の叱責を感じたであらうと著者が述べて居ることによつて明かである。

かの南阿戰爭の始に英國の Chamberlain が獨逸に同盟を提議し、更に戰爭の終末後これを繰返し次いで一九一二年の Haldane Mission 最後には一九一四年七月の危機に際せる英國外相 Grey の列國會議開催の提議と云ふ、英獨關係の緊張時代の四個の機點に於て、英獨間の親和成立を阻害し、延いては歐洲全體の平和を破るに至りし主因は、實にカイゼルその人の英國に對する強き輕蔑の念で

あつたとする著者の主張には頗る興味を感ずるのである。Tiplitzの出現によつて獨逸の海軍政策が一躍發展を示し、こゝに英獨關係に大なる暗礁を作るに至つたことは、最近國際關係史上に於て看過すべからざる重要現象であるが、この時宰相ビュローは、これによつて英國との關係悪化すべきを憂へ、艦隊建造の度を弛くせんことを主張するに至るや、彼はカイゼルの信任を失ひ、最早彼はカイゼルにとつて「神そのものによつてかくあるべく作られし余の最善の友」ではなくて「Caesar Borgia 以來の最大の虚言者、偽善者」となり、遂に辭職するの止むなきに至つたのである。Tiplitzこそは、カイゼルの對英感情を悪化せしむるに與つて力ありし人物であつて、他の政治家、外交官の穩健なる意見を排して、どこまでも獨逸の海軍策を發展せしめんとしたのである。かくて、この人物からの影響の下に、カイゼルの對英感情は次

第に險惡となり、その極遂に彼自らが、平生常にその可能性を嘲笑に附して居た英國との戰爭を爲すの他なきに至つたものであつて、この間彼に種々の警告的諫言を與へた人物は多く不興を蒙つたのである。しかもカイゼルは尙ほ世界大戰に對する何等の責任を認めずして、これ英國のエドワード七世の *Einkeisungspolitik* の結果なりとし、英國を呪咀すること限りを知らない程である。この間の叙述に於て著者が、大戰の責任をカイゼルに歸せんとする心意を有して居ることは明かなるやうに思はれる。

最後に、一九一八年十一月カイゼルが遂に參謀本部を脱出して中立國和蘭に逃るゝに至つたカタストロヒーに對する著者の頗る劇的なる描寫は興味甚だ大なるを覺える。著者はこの時のカイゼルが古き祖先の武士的誇りを棄て、何ら名譽的、悲壯的なる言葉を發せず、彼の爲に死んだ幾百萬

の人の魂を見棄て、周囲の阿諛的人物の甘言を容れて、卑怯にも夜の暗にまぎれて和蘭へ逃れるに至つたカイゼルの背信的態度を鋭く非難して居る。

この劇的シーンの描寫を以て著者はその筆を收め、吾人をして、かゝる卑劣なるカイゼルに對してその復位運動が未だ獨逸國內に存在して居るに驚かざるを得ざらしめて居るのである。しかも吾人は、カイゼルの不徳なる性格に對する著者の頗る峻烈なる解剖を尙ほ多く讀み行けば、かゝる驚きは益々大となるであらう。四分の一世紀以上世界にその覇を稱したカイゼルの活動は、これ、諸外國の人を偽り獨逸國民を欺き、世界を舞臺とした一個の劇を演じたものである。この「お芝居的巧妙さ」に對する世人の驚愕は、本書の通讀によつて甚大なるに至るであらう。

要するに本書は、カイゼルの被つた假面をもぎ

取つて、その個人的性格に痛烈なる解剖、非難を加へると共に、その周囲の黒幕的勢力となりし人物を光明の世界に引出してこれに批判の筆を加へたものであつて、カイゼル、ウキルヘルム二世の宮廷生活の裏面を遺憾なく暴露したものである。その史料の豊富にして且正確なること、その論議の冷靜にして偏見なきことは從來の、カイゼル宮廷生活の裏面史と大いに趣を異にし、單に史學研究の人のみならず、一般智識階級の人士にとつても頗る興味ある著述であると信ずる。

終にタイムズ評論家の比喩を假りていはゞ、戦後ロイド・ジョージはウキルヘルム二世をウエストミンスター・ホールへ召致して裁判せうとの奇峭峻烈な計畫を立てたことがあつたが、それよりも尙ほ一層痛酷な刑罰をば、完膚なきまでの性格の解剖によつて、カイゼルの頭上に加へたのが本書である。(The Times, Literary Supplement, Oct. 21, 1926)